

# 会員「刊行物」紹介

近年、自分の歩んで来た過去を振り返り、これからの人生を考えてみたい、自分の研究課題に取り組み、その成果をまとめてみたいと願う人々が増えつつあります。昨年度「別府史談・第十九号」から皆さんの玉稿披露の場として標記紹介欄を設定しました。積極的にこの欄をご利用ください。

\*ご希望の方は最寄りの理事までご連絡ください。

## 出版書籍

### 『湯の花の研究』湯の花と

### ハイノキで明礬をつくる』

恒松 栖著

国の重要無形文化財に昨年指定された、別府市明礬温泉の「湯の花製造技術」、そのもとになった明礬の製法を別府大学

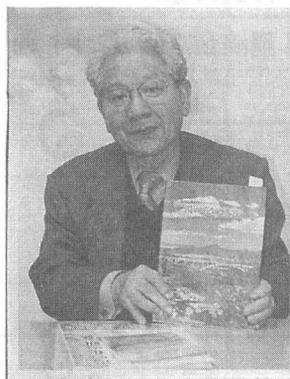
短期大学教授の恒松栖すゐかさんが文献などをもとに再現した。

「最初はそんなに難しくなかったと思うたがやってみるとなかなか大変だった」(中略)「別府の特産品だが、製法は秘伝とされていたので、詳細は分からなかった」。ヒントは貝原益軒が書き残した『豊国紀行』にあった。昨年夏、自宅台所を実験室に再現を試みた。(中略)

小学生の頃両親の湯の花作りを手伝ったのが研究のきっかけだった。(朝日新聞より)

## 明礬の製法 研究成果を本に

国の重要無形民俗文化財に昨年指定された別府市明礬温泉の「湯の花製造技術」。そのもとになった明礬の製法を別府大学短期大学部教授の恒松栖さん(89)が別府市湯の花ハイノキで明礬をつくる写真集が文庫などをもう再現した。最初はそんなに難しくなかったが、やってみるとなかなか大変だった。



「別府の特産品だが、製法は秘伝とされていたので、詳細は分からなかった」。ヒントは江戸時代の学者貝原益軒が書き残した『豊国紀行』にあった。昨年夏、自宅台所を実験室に再現を試みた。

スコンロで加熱と冷却を繰り返して明礬の精結晶を取り出し、さらに結晶を大きくする一に成功した。

曾祖父が明礬作りのため、明治初期に旧野田村(現、別府市野田)から現在地に移住。小学生のころ両親の湯の花ハイノキを手伝った記憶が研究のきっかけだった。

「湯の花の精液とハイノキの木の灰汁の混合液を作り、ガラスの瓶に入れておく。この瓶を湯の中で加熱し、冷却を繰り返す。この作業を繰り返す。この作業を繰り返す。この作業を繰り返す。」

これまでの研究成果は『湯の花の研究』湯の花ハイノキで明礬をつくる』という一冊の本にまとめ、近々自費出版する。(日吉書局)

◇ 本は5判、140p、定価500円。問い合わせは恒松さん(0974-88-0066)。